

赤谷の森だより

AKAYA PROJECT

赤谷プロジェクト地域協議会
財団法人自然保護協会
赤谷森林環境保全ふれあいセンター

第 7 号



コラム*赤谷の森から

五年目を迎える 赤谷プロジェクト

赤谷プロジェクト地域協議会



岡村 興太郎

新年おめでとうございます。赤谷プロジェクトの活動が五年目を迎えようとしています。翻って思えば、前例のない環境管理の試みがよくここまで続けられたという感慨があります。しかし一方で、周囲からは相変わらずどんな活動をしているのかよくわからないという声が聞かれることも事実です。この「赤谷の森だより」の発行などによって、地元にもプロジェクトの存在が徐々に知られるようになってきました。それによって私たちの地域がどんな姿になっていく可能性があるのかというイメージが具体的に描けないからかもしれません。

これまでは動植物のモニタリングなど、この「赤谷の森」の自然を様々な角度から調べる活動が中心でしたが、徐々に地域社会と直接つながる活動が始まっています。

昨年は、地元の方々にも参加していただいた「ムタコの

日」で、私たちの生活を支える、安全でおいしい水を守るための環境整備の活動を開始しました。また、旧三国街道を中心に、安全で気持ちよく歩け、さらに自然や文化に触れることのできる道にするための計画作りが進行中です。環境教育に対する取り組みでは、地元の小中学生・高校生が「いきもの村」を訪れています。様々な活動で、地元の皆さんとの接点が増えています。

残すべきところは残り、変えるべきところは変える。時間がかかるが、自然に問いかけ、その答えを聞きながら、森林に手を入れる。これまでとは違う仕事のやり方に戸惑いもありましたが、その反面、期待も膨らみます。五年の年月ぐらいいはそうは変わらないと思いつつも、この五年という時間の重さは計り知れず、私は赤谷プロジェクトとこの地域の未来にいつも思いを馳せています。

赤谷プロジェクト紹介

赤谷の森と

ホンドテン調査について

—テンの視点で環境を評価する—

はじめに

私たちが生きる21世紀は「環境の世紀」と言われており、自然との「共生」がキーワードの一つに上がっています。しかし、「共生」とは具体的に何をどうすることなのでしょう？ 動物たちと仲良くすること？ シカやイノシシの農作物被害を解決すること？ 国外・地域外から外来生物を侵入させないこと？

野生の動物たちも自然からの恵みによって生きています。そこで「動物たちは自身が暮らす環境をどう見ているのか？」と考えてみました。私たちにとっての環境と、動物にとっての環境の見方を比較することで、よりバランスが保たれた具体的な「共生」に一步近づけるのではないのでしょうか。同じ地球上のいきものとして身近な仲間であるテンの暮らし方を見てみることにしました。

テンという生き物

私はテンを対象に研究をしています。テンは全国各地の人里に暮らす身近な生物です。しかし、人々に聞き取り調査をすると、名前は知っているのに野生の本物のテンを見たことがないという人



カラマツ林のテン

が意外と多いのは不思議なことです。姿が似ているイタチと混同されている場合が少なくありません。

イタチ科に属するテンは、このグループ(科)の中ではもつとも多様な環境に対応して生活していることがわかっています。海岸から山地までをすみかとし、樹木に登ることが得意です。そして、都市のど真ん中や池など以外ならどんな環境にも適応する能力を持っています。凶鑑などを見ても、食べるものは多様で、動物や植物(主として液果)を幅広く食べると書いてあります。テンはどこにでも出没し、いろいろなものを食べる動物なので、す。

特定の環境やえさに偏らないということは、すみかとする環境をどう見ているのか、という疑問に迫るのにもってこいの対象動物でしょう。ところが、テンという動物の暮らしぶりには多くの謎

があり、詳しい研究がされていません。私は試行錯誤や予備調査を重ねた結果、テンの食べものに焦点をあて、テンにとって赤谷の森がどんな環境かという疑問に迫っていくことにしました。

調査対象はテンの落としもの

野生の生きものにとって食料問題は、生き死にに直接関わる重要な問題です。したがって多くの動物たちは、独自の食料とその入手方法を身につけています。さっそく、テンが何を食べているのか？を調査することにしました。

テンは夜行性の動物ですから、サルなどのように明るいうちに餌を採っているところを直接観察することはできません。そこで、テンが落とす糞に着目しました。イタチ科の動物たちの多くは、明るく目立つ場所(登山道、林道、河原、岩の上など)で糞をするため、分析する試料(サンプル)が集めやすいのです。

テンは自分が暮らしている環境の中から食べものを調達します。野生ですから、これ以外に方法はありえません。したがって、その環境にある餌となりそうな動植物を調べれば、何を食べているかがわかる。ということも考えられそうなのですが、。実際に同じような環境であっても、調べる糞の中身が地域ごとに違ってしまふ場合が多々あります。

このことは、糞の内容物がテンの暮らし環境の特徴を推測することを可能にし、その環境がテンにとってどんな質を持っているかという謎に迫れるのではないのでしょうか。さらに、これらを長期にわたって追跡すれば、糞の内容物の変化(実際に起こるのです)が、その環境の何らかの変化をあらわすかもしれません。

もちろん、森にはテンだけがいるわけではあり
ませんから、すべてがわかるわけではありませ
んが、森の環境を評価する「ものさし」になるの
ではと考えています。

テンモ二隊誕生

さて、赤谷の森に暮らすテンが何を食べてい
るのかを調べるために、森を歩き糞を集め、分析
します。といっても相手はウンコですから、いき
なり手づかみというわけにはいきません。糞には
多くの細菌類やウイルスなどが付着しているとい
う前提で、慎重に取り扱います。素手で不用意に
さわったり、乾燥した糞をほぐしてホコリを吸い
込んだりといったことを確実に避ける必要があ
るのです。



テンモ二隊の調査風景

また、データ(記録)の取り方を統一しておか
ないと、それらが蓄積されてきたときに不都合が
起きることも考えられます。

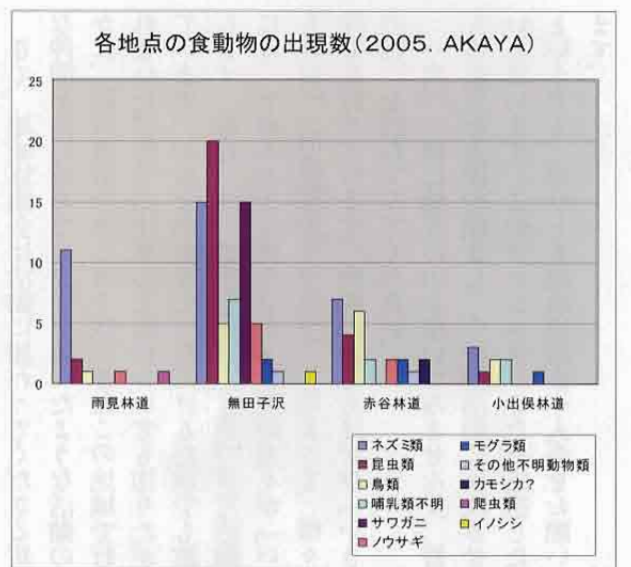
2年ほど前から、毎月1回の「赤谷の日」に集
まるプロジェクトの仲間たちの中で、テンに興味
がある人たちを対象に調査の講習会を行い、安全
に統一したデータがとれるチームができました。
私たちは自分たちのことを「テンモ二隊」と呼ん
でいます。今では、1年を通して毎月数回の調査
を行うようになりました。

調査は、落石などに注意しつつ山を歩きながら、
テンが落とした糞を探す大変な作業です。しかも、
ボランテアで年間を通して実施するとすると負
担は大変です。現在では、調査をしながら糞の中
身を簡単に分類でき、テンが好む植物(たとえば
ヤマブドウやサルナシなど)の実はなり具合を森
で観察するなど、頼もしくも優れたフィールドワ
ーカーとして活躍しています。

赤谷の森の自然環境に迫る

赤谷のテンの暮らしぶりを把握し、森との関係
を探るために、まずはテンが赤谷の森で何を食
べて暮らしているかという基礎を把握することが大
切です。これまでに行われた調査結果の一部から、
赤谷の森の自然環境の特徴を少しご紹介します。
下の図は、平成17年に赤谷の森の各地区で採取さ
れた糞の内容物の分析から、テンがどんな動物を
食しているのかをまとめたものです。

赤谷川(赤谷地区、川古温泉より上流)、小出俣
沢(赤谷地区)、ムタコ沢(永井地区)、前野沢(合
瀬地区)など赤谷の森の各流域は、植林の樹種や
広さなどにそれぞれ違いはありますが、溪流に沿っ
た広葉樹林や上流部のブナ林など、大まかには似
たような環境にあると考えられます。しかし、図
によると、各流域に暮らすテンの食べものは明ら
かに違ってきます。これらはテンが餌を好み



足立高行
大分市在住。応用生態技術研究所所長。財団法人自然保護協会 技術士。環境カウンセラー(環境省登録)

しているのではなく、各沢の環境の質が異なっ
ていることが反映されているのではないかと考えら
れます。

どうしてこのような違いが生まれるのか？ 私
たちはテンの餌となる植物の分布や糞に現れる頻
度などを比較しながら、謎を解く作業を進めてい
ます。今後ともデータを集めながら、赤谷の森が
動物たちにとってどんな環境なのかを知り、人間
も動物も、森からの恵みによって健やかに暮らす
ことのできる環境を取り戻す活動に貢献したいと
考えています。

関係者紹介

このコーナーでは、赤谷プロジェクトの関係者(団体)を紹介します。
今回は、「赤谷プロジェクト地域協議会」について紹介します。

赤谷プロジェクトは、林野庁関東森林管理局と日本自然保護協会、そして地域の組織である私たち「赤谷プロジェクト地域協議会」の連携によって運営される、自然環境管理のまったく新しい協働の仕組みです。二者の直接的な合議によってプロジェクトの意思決定がなされることは、地域協議会が極めて重要な主体であることを示しています。

地域協議会には、赤谷の森および周辺地域の人々(主にみなかみ町民、沼田市民)が、プロジェクトの目的に賛同して自発的に集まっています。現在のところ会員数は約50名ほどです。近い将来、NPO法人への移行をめざし、名実共にこのプロジェクトを推進する中核団体として機能させたいと考えています。

現在、地域協議会には以下のように会長1名、代表幹事1名、理事6名、会計監査2名を選出し、会員が多様なプロジェクトの事業に関与しています。なお、現在のところ会費(日々の連絡費など運営経費)は年間1,000円をお願いしています。

地域協議会は平成15年9月に私たち地域の有志によって発足しました。赤谷プロジェクトは「生物多様性」と「持続的な地域社会」という観点から、「赤



- 会長 岡村興太郎(永井地区)
- 代表幹事 林 泉(赤谷地区)
- 理事 岡村 建(永井地区) 本多 史郎(恋越地区)
- 河合 明宜(東峰地区) 松井 睦子(沼田市戸鹿野町)
- 長浜 陽介(後閑地区) 安田 剛士(沼田市戸鹿野町)
- 高橋 忠夫(永井地区) 星野理恵子(沼田市戸鹿野町)
- 会計監査

谷の森」の自然を豊かにしていく取り組みですが、私たちは人間社会と自然との調和をはかり、長期にわたってこの地域が持続的に発展するような仕組みを作ることを中心に、プロジェクトの中で役割を果たすことを目標にしています。

会員は様々な活動に関与しています。赤谷の森の自然を保全し次の世代へ引き継ぐために、動植物の調査に関わり、赤谷の森をどう管理していくのかについての知識の蓄積に貢献している方々や、赤谷の森を訪れる人々や児童・学生に教育活動を行っている方々、「ムタコの日」で水源の森を整備する活動を行っている方々、旧三国街道をよりすばらしい自然散策路にするためにアイデアをまとめている方々、「いきもの村」でサポーターに炭焼きの指導をしている方々、かつての森の様子語り部になってくださる方々、関わり方は様々です。

赤谷の森はみなかみ町のかんりの部分を占めています。合併に際し、みなかみ町は豊かな自然と水源の町として、山と森林と川を守り育む「水と森林の防人」宣言を行い、新町作りの指針としました。このことから、この地に住む私たちは、豊かな水や

温泉、そして森林からの恵みを受け継ぎ育み、次世代へ伝える使命があります。今後は行政とも提携し、この赤谷プロジェクトを通じてまちづくりにも貢献したいと考えています。そのためには、地域内の観光業や林業などを活性化していくことも重要になります。

さて、地域協議会は活動に加わってくださる新たな仲間を常に求めています。述べたような活動のほかに、研究者やサポーターは、またこの地域で行われていた習俗や山仕事の文化についても知りたがっています。お話を聞かせていただけだけでも歓迎します。毎月一回、「赤谷の日」と名づけた活動日には、サポーター(ボランティア)の方々が「いきもの村」(旧境野苗畑事業所)に集まって、様々な作業を行っています。興味のある方はぜひ「いきもの村」を訪ねてみてください。

一度、一緒に地元の山を歩いてみませんか。皆さんの意見を直接お聞きし、今後の活動に反映させたいと思います。このプロジェクトをただ応援したいという方も、ぜひとも地域協議会へ入会をお願いします。

■赤谷プロジェクトに望むこと

求められている環境教育



春田 隆

群馬県立利根実業高等学校
グリーンライフ科長教諭

(出身地群馬県。平成十年より利根実業高校勤務。平成十九年より現職。)

環境教育の重要性

私たち人間の生活を、健全で文化的なものにするために欠かすことのできない環境。しかし、世界各地では環境破壊に関する様々な問題が発生しており、国際的に環境に対する意識がたかまっています。

こうした中、2002年に日本が国連総会で決議案を提出した「国連持続可能な開発のための教育の10年 (UNDESD = United Nations Decade of Education for Sustainable Development)」が2005年にスタートされ、持続可能な社会の構築を目指し、様々な取組みが始まった。

これを受けた文部科学省は、環境教育の意義について「環境や環境問題に関心・知識をもち、人間活動と環境とのかかわりに関する総合的な理解と認識の上にならざるを得ない環境の保全に配慮した望ましい働き掛けのできる技能や思考力、判断力を身に付け、持続可能な社会の構築を目指してよりよい環境の創造活動に主体的に参加し、環境への責任ある行動をとることが出来る態度を育成すること」とした。

これにより2006年12月「教育基本法の改正」翌2007年6月「学校教育法の改正」さらに「21世紀環境立国戦略」と「経済財政改革の基本方針2007」が閣議決定された。

環境教育は、生涯学習として学校、家庭、社会が連携し、継続的におこなわれることが重要である。また、地域の実態に対応した課題から取り組み、身近な環境問題だけで終わらず、最終的には地球環境問題につながっていることを認識させ、地球規模の環境に配慮した問題解決の意欲、態度、行動力を育てていくことが大切である。

赤谷プロジェクトは、まさにこうした活動の先駆けであり、環境教育の場において、なくてはならないものである。本校グリーンライフ科森林科学コースでも「いきもの村」を学習活動の場としてお借りし、赤谷プロジェクトの活動説明や猛禽類や野鳥の観察等をさせてもらい、環境教育の導入として支援していただいている。

環境保全の問題

今年、本県群馬・福島・新潟・栃木の4県にまたがる「尾瀬国立公園」が誕生し2ヶ月が過ぎ、「観光と自然保護の両立」をめざし様々な取組みが進んでいる。

これにより29カ所の国立公園が存在するが、先日訪れたとある国立公園では環境を脅かす問題が散見された。湖の水質悪化や外来生物の流入、ゴミの投棄、表土の流出、ふさわしくない案内看板、オーバーユース、公園の維持管理に必要な人手不足などである。これでは「持続可能な環境」は維持できず、いずれ取返しのつかない事態を招くおそれがある。

「持続不可能」な社会を変えるには、個の価値観

や行動の変化が必要であり、個の変容を促すためにも「つながり(関係性)」や「想像力と創造力の育成」、「人間力の醸成」などへの取組みが大変重要である。

赤谷プロジェクトへの期待



授業の様子

植生調査やスギの間伐試験、大型猛禽類の調査や溪流環境復元、本校をはじめとする猿ヶ京小学校や千葉市の中学校への環境学習等、その活動は多岐にわたり、関係者のプロジェクトに掛ける熱意が伝わった。

さらに日本自然保護協会との連携によるセミナーや自然観察指導員講習会など、自然との関わり方についての講習を開催し、先に述べた文科省の「環境教育の意義」に多大な貢献をするとともに、「国立公園が抱える環境問題」や「持続性をめぐる問題」の解決においても大変興味深い取組みをしており、今後の活躍がますます期待される。



最近の活動紹介 & 活動のご案内

イヌワシ調査



赤谷の森のイヌワシ調査

「赤谷の森」には、国内希少野生動物種のイヌワシが棲んでいます。赤谷プロジェクトでは、日本イヌワシ研究会と協力して、イヌワシ調査を10月6～8日に実施しました。全国から集った専門家および赤谷プロジェクト関係者約70名による大規模な調査により、イ

ヌワシの貴重なデータを収集することができました。今後もイヌワシ調査に取り組み、「赤谷の森」の管理に活かしていきます。

猿ヶ京小学生、いきもの村を体験



話を熱心に聞いています

10月10日、地元猿ヶ京小学校の3年生15名が森や森にすむ生き物の勉強のため、いきもの村を訪れ

ました。センサーカメラで撮影された野生動物の写真を見ながら勉強をした後、実際に森に入り自分たちで野生動物が出そうな場所を選びカメラ（自動撮影カメラ）を設置しました。（撮影された写真にはいろいろな生き物が写っていました。子供達はそれを見て、どのような感想を持ったのでしょうか）また、森の中では「植物の匂い」をテーマに、いろいろな植物の匂いを嗅ぎながら、その違いに驚いていました。楽しいいきもの村体験が出来たのではないのでしょうか。こうしたことを蓄積して、子供たちには地域を支える環境の大切さを学んでもらいます。

旧三国街道 ワークショップ

旧三国街道として残る散策歩道のよりよい活用を考えるフットパス網計画に、地域協議会と「地域づくりワーキンググループ」が中心となって取り組んでいます。8月2日、9月30日に猿ヶ京多目的集会所でワークショップ（具体的な事例を用いた検討会）を行い、10月23日には現地でワークショップを行いました。赤谷プロジェクト関係者及び猿ヶ京地区住民が、トルメ国境周辺から森へ入り、治部・

大般若塚・永井・吹路を経て、猿ヶ京へ戻るルートを歩きました。歩道の中には荒れて補修整備が必要な箇所が確認できましたが、かつて地域住民が盛んに利用していたルートを再現することができました。参加した地元住民の方からは「身近な場所なのに今回はじめて歩いた。このようなよい場所があることがわかり参加してよかったです」との感想が聞かれました。

また、旧三国街道や「赤谷の森」周辺での、かつての森林と人との関わりを再現する聞き取りを進めています。これまでの聞き取りでは各地区の茅場などの位置がわかってきました。かつて山仕事で頻繁に山に入られていた、できるだけ多くの方々に協力いただきたいと考えていますので、よろしくお願いします。

研修の場としての「赤谷の森」

赤谷プロジェクトは国内外の様々な団体・機関の研修の場としても活用されており、海外からの研修生も受け入れています。

今秋は、9月に中南米、東南アジア、アフリカから11カ国11名の方々が訪れました。皆さん自国に戻れば、その国の森林・林業を背



JICA研修

負って立つ方々です。また、10月には中米パナマから国立パナマ大学教授が2名、12月にはブラジルの「アマゾン群馬の森(群馬県からアマゾンに移住した方々で所有管理している森林)」の関係で、ブラジル人2名が研修に訪れています。

「赤谷の日」で炭焼き

12月1、2日は、サポーター(ボランティア)による調査や研修活動を行う「赤谷の日」を開催しました。

通常行われるホンドテン調査、種子の豊凶調査の他に、今回の活動は、地元の笛木正幸さん(永井

地区)を先生に、地域に残る貴重な文化の一つである炭焼きを行いました。今回で三回目となります。炭の材料は、ナラ、クリ、ホノキ等で、窯入れ、火入れ、火落としまで行い、1月中旬に窯出しの予定です。うまく炭が焼けているか、今から楽しみにしています。



赤谷の日の炭焼き

今度のイベント

●NHKの子供向け教育番組「モリゾー・キッコロ 森へ行こうよ!」の撮影が「赤谷の森」で進められ順次放送されています。番組では、プロの自然案内人と猿ヶ京小学校の子供たちが「赤谷の森」の自然や動物の四季を楽しく

紹介しています。今後の放送スケジュールは、残り2回となり次のとおりです。ぜひ放送をご覧になってください。

放送スケジュール(予定)
NHK教育/土曜午前9:00~9:15

2/9 森の探偵団SP③

3/15 森の探偵団SP④

●赤谷センターでは、主に群馬県内の自然や環境に興味のある方を対象に、「赤谷の森 自然散策」を計画しています。

「第三回赤谷の森 自然散策」は、冬の森林の顔である樹木の冬芽や冬の森林について、座学、野外実習を交え、楽しみながら学ぶことができます。皆様のご参加をお待ちしています。

第三回 赤谷の森 自然散策

日程等

●開催日

2月17日(日)(荒天時は中止)

冬の森林・冬芽の観察、フィールドサイン

●場所

みなかみ町相俣 いきもの村

●参加資格

小学4年生以上(小中学生は保

護者同伴)

●参加費

無料

●集合場所・時間

関東森林管理局(前橋市)9時出発、利根沼田森林管理署(沼田市)9時50分出発。

●終了時間

現地です15時30分の予定。バスで集合場所へ戻ります。

●服装等

森林散策のできる服装(防寒着、帽子、長靴)。昼食、飲み物、雨具持参。

●申し込み締切

実施日の4日前まで。

●申し込み・問い合わせ先

最終頁の赤谷森林環境保全ふれあいセンターまで。

編集部

だより

新年を迎え関係者一同、気持ちをあらたにプロジェクトの推進に取り組んでまいります。よりいっそつのご支援をお願いいたします。

(赤谷の森のツツペ)

